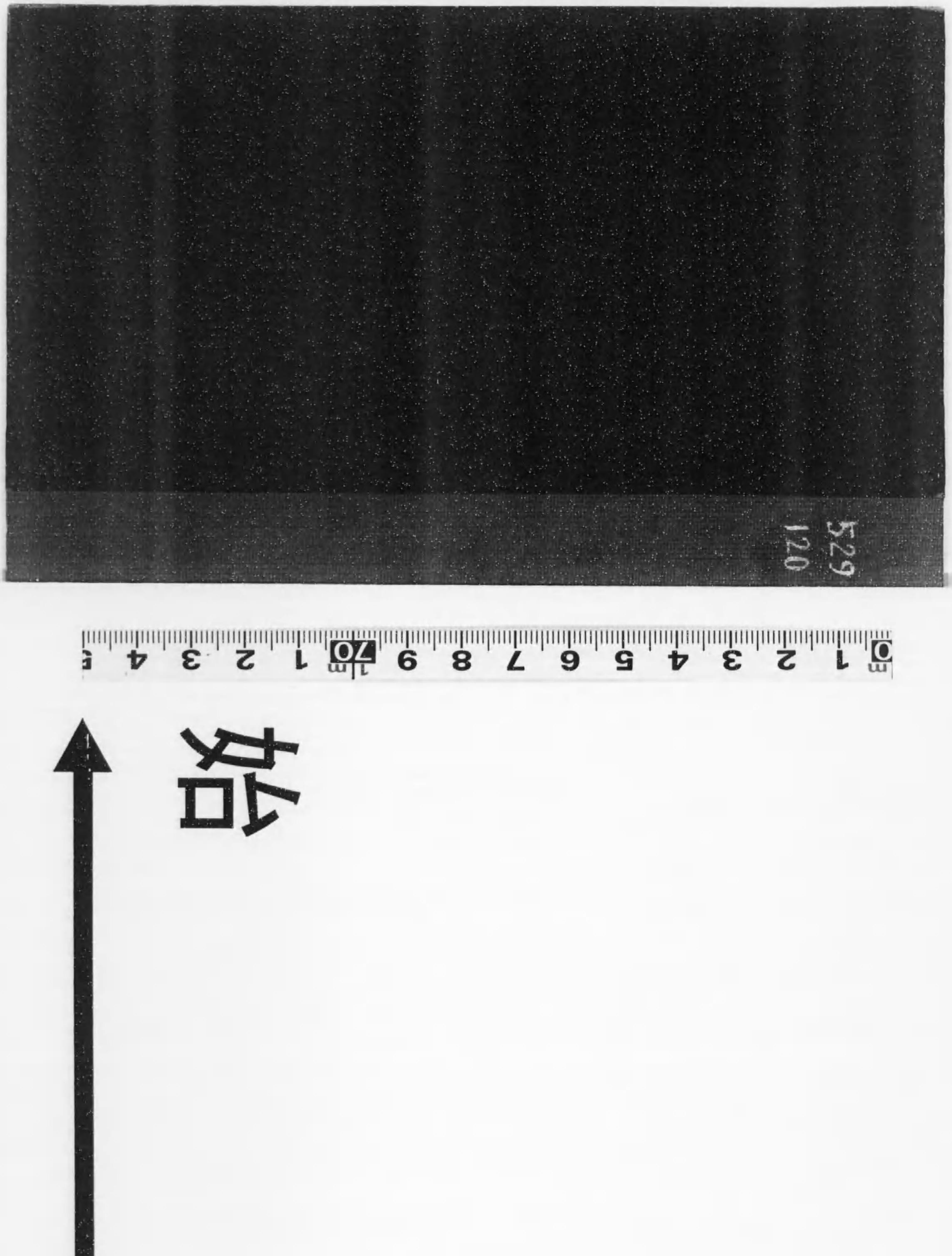

529
120
40

12504

希臘詞花抄

竹友藻風

1924

新しき村出版部刊行

大正
13.9.9
内交

與謝野晶子夫人に捧ぐ

529-120

希臘詞花抄　目次

希臘詞花抄

笛……一七
鏡……一八
漁夫……一九
幼兒の死……二〇
幼兒のための祈り……二一
機女……二二
嫁ぐ日に……二三
妻……二四
船のり……二五

ティマス……二六
蘆……二七
水……二八
貝足……二九
盾のうたへる……三〇
エリンナ……三一
ねたみ……三二
エロス……三三
灯火……三四
眠……三五
西風……三六
夕占問……三七
かもめ……三八
こほろぎ……三九
ライスの鏡。一……四〇
二……四一
三人のうから……四二
園丁……四四
ロドオペエ……四五
月あかり……四七
廃墟……四八
テルモピライ……四九
パンフィリヤ牧歌
樹……五八
牧歌……六〇
母の教……六二
素足……六四

老人とニンフと……六六
物語……六八
ビリティス……七〇
ビリティスの墓
第一の銘……七二
第二の銘……七五
最後の銘……七八

聲律

聲律……八六
夏……八八
想の廬……九〇
夕月……九二
風に乘る……九四
月あかり……九七
こころ……九九
冬の日……一〇一
ナイアッド……一〇三
日の終……一〇四
嘆嘆……一〇七
水夫のうた……一〇九
女のうた……一一一
巡禮のうた……一一三
挿繪（希臘古瓶より）大英博物館所藏……一一
……巡三
……八三

希臘詞花抄

裝幀

廣川松五郎

希臘詞花集は波斯戰爭の頃よりビザンティウム帝國の殁落に到る迄、前後二千年の詞章六千餘首を包括する歌集なり。ホメエロスは更にも言はず、アイスヒュロス、ソフォクレエス、ピンダロスなど、或は霧嶺峻嶽のごとく或は河海江水のごときもの、もとより希臘文明の大を成す所以なれど、メレアゲル、カリマコス、パラダス、シモニデスなどの野花幽草に限なき趣を掬するもまた妙ならずや。ファイディアス、スコォパスは仰いで歎賞すべし。われは名も無きタナグラ人形の、糸を紡ぎ、衣を濯ふ、なつかしき古代の姿をも忘れ難

きなり。況やこれはアティカとアレクサンドリアのみの所産にあらず、ロオマ、パレスティナ、ビザンティウム、その他、凡そ希臘人の住むところ、マグナ・グレキアは更なり、地中海の波のさよめきと共に多島海のいと小さき島山の果にいたるまで詠吟の聲絶えず、墓に刻み、家の礎に残して詳さにヘラスの生活を閲したるものなるをや。詩歌の觀念を究むるものはここに伊太利亞のストルネルロ、リスペットオ、或はわが短歌に最も近き純情表現の樣式を見るべく、考古の僻ある者は古瓶のおもてに描かれたる姿態生動する思あらむ。紀元前二百年ボレモンの纂修ありしより今に到るまで註疏飜譯のわざの絶えざるも宜なるかな。

ここに收めたる數十章はもとよりその飜譯にはあらず。詞花集を繙きながら、遙かにわが心より浮び出でたるおもかげを捉へたるのみ。フィッツジェラルドが波斯詩人の詞想を移したる神工の迹には似るべくもなけれどその志に於いて或は近きものならむ。佛蘭西の詩人が傳へたるビリティスのうたとともに、かかる類の文學も存在を許さるべきことを思ひて希臘詞花抄と題す。

藻風

笛

うらわかき春の日は逝きてかへらず、
無花果の木のもとに、パアンよ、われの
うづむるを受けたまへ、老らくの身に
やうもなき笛ひとつ、音こそかはらね。

マケドニウス（六世紀）のうたにダフニスといへる笛吹きのこころを
詠みしものあり。パアンは野山を司る神。蘆笛の妙手なり。

鏡

妹よ、われはいまペルセフォネエの
統べたまふ常世邊に行かむとすなり。
鏡こゝ、形見なれ、月の夜な夜な、
すかし見て偲ぶらむ汝とまみえむ。

ペルセフォネエは幽界の女皇なり。

漁夫

いさなつりダモフィロス、この川に住む
ニュンフェらにささぐるは釣竿ひとつ、
なりはひの樂しかりしも、寂しかりしも、
うす日さす夕ぐれの蘆の葉の風。

希臘詞花集に多き手向けのうたの例にならへり。ニュンフェは野山の精なり。

幼兒の死

わがこころ憂に染まぬいつとせの秋、
無慘なる死の手に依りて果敢なくなれり。
泣くなかれ、人の世の幸はなくとも、
しかすがに小さきなやみをわれは知る。

ルウキアノス（年代未詳）のうたの意を述べたり。

幼兒のための祈り

いとほしきカリテスは母にわかれて、
ただひとり旅すらむ常暗のくに。
アスフォデル咲く原のありとはいへど、
をさなごの足なれば守らせたまへ。

アスフォデルは幽界に咲く花。

機女

あしたには簷を飛ぶつばめの歌と、
ゆふべには壁に啼くいとぎの聲と、
ききまがひ、歌ひかはせし賤機の
いのちこそ絶えにけれ、布のなかばに。

シドンのアンティパテル（前一世紀）のうたの意を述べたり。「烏夜啼」のあはれには異れども盛唐七古の姿を偲ばしむるものあらむ。

嫁ぐ日に

嫁ぐ日の來しゆゑに、皷と鞠と、
うなゐ髪結びし紐に、幼馴染の
人形を添へまつるなり。常處女なる
アルテミス、處女の幸を守らせたまへ。

詞花集に無名のうた多し。これもそのひとつなり。

妻

その帶に花を縫ひたる衣添えて、
いわた帶もろともに供へまつりぬ。
みごもれる十月がほどのくるしみを
產褥のなやみより救はれし妻。

ペルセス（前四世紀）のうたの意を述べたり。

船のり

名もなくてただひとり、ことくに人の
海岸によこたはる船のりの墓。
ふるき日の友なれや、むせび泣きつつ、
わたつみの波はぞよみぬ、夜もすがら。

ティマス

嫁ぐ日にさきだちてペルセフォネエの
幽暗の室に入りにしティマスぞ臥せる。
少女ごち磨ぎすましたる及にて
うるはしき髪切りおとし墓に手向けぬ。

サッフォオ（前七世紀）の歌集より。

蘆

靜かなれ、野も山も音をひそめよ、
牧羊の神ぞいま蘆の笛吹く。
白雲は大空の胸になづさひ、
夕ぐれの水冴えて魚も沈めり。

プラトオン（前五世紀）のうたにこれに似たるものあり。

水

あけがたの水のおもてのきらめくは、
ニュンフェらの舞の素足の跳るなり。
夕ぐれに水のおもては冴えわたり、
そこはかとうつすらむ、白きただむき。

具足

すさまじき戦(いくさ)もののぐ、今脱ぎすてて、
アテネの宮の軒邊にわれはかけなむ。
雄たけびの中のいくたび、くれなるに
まみれけむ、ペルシャの騎士の血をあびて。

シモニデス（前五世紀）のうた。

盾のうたへる

われここに戰場を遠く離れて、
憩へども亡き人ぞ夢に通へる、
いくとせの命にかはり、終まで
その肩を守りたる若きますらを。

ムナサルカス（前四世紀）のうたの意を述べたり。

エリンナ

十九にてみまかりし少女なれども、
エリンナの歌こそはたぐひもあらね。
短きは燃え果てし命のほむら、
すくなきは名玉のかずなきがごと。

アスクレピアデス（前三世紀）のうたの意を述べたり。エリンナはレスボスの女詩人にして、サッフォオの友なりき。

ねたみ

ねたみこそかなしけれ、無明のやみぢ、
わが戀のわたつみに波はさかまき、
たましひの梶折れて行方も知らず、
流れつつみとめしはスキュルレの磯。

メレアグル（前一世紀）のうた。
スキュルレについては「オデュセイア」第十二卷第八十二行を參照すべし。カルユブディスと共にシチリアの岸にありと傳へらるる鳴戸の磯。

エロス

いそのかみトロヤの原に夫を置く
ひとりねの十とせの秋も何かあらむ。
ひらかれし腮邊より逝きてかへらぬ
エロスこそ戀人の姿なりけれ。

エロスは愛の神。

灯火

消えうせよ、ほのかなる灯火のかけ、
汝のみぞわが戀のちかひのあかし、
戀びとはわれならぬ胸にいこへる
このひと夜、わが部屋の灯火消えよ。

メレアダル（前一世紀）のうたの意に從へり。

眠

眠れるか、戀人よ、汝が目のうへに
翅なき眠となりてわれは眠らむ。
眠こそ神をもあやせ、われはそれすら
追ひ退けてわれのみのなれを占めなむ。

メレアダル（前一世紀）のうた。

西風

吹く風のゆたかなゼフロスのため、
オイデモス、その原に建つるみやしろ。
ねぎごとの甲斐ありて垂穂はみのり、
畑中に熟みわたる時もかなへり。

メッキリデス（前六世紀）のうたにならへり。ゼフロスは西風。

夕占問

"ENODIOI SUMBLOI, or omens by the wayside, as the old Greeks fancied." Marius the Epicurean

ヘルメスは旅人の道をまもりて、
やすらかにふるさとへ伴ひたまふ。
うすれ行く夕ぐれの日ざしの中に、
その人の影見ゆと言ふは誰が子ぞ。

ヘルメスは傳令の神なれど、希臘のある地方にては道路神として祀られ、道の辻に石を積みて禮拜の場處に充てたりといふ。

かもめ

逝きにしか、カリスの神のめでたまふもの、
その聲はハルュクオオンに似かよひけりな、
いとほしきかもめよ、清きそのうたと
柔魂(にぎたま)は道にほろびぬ、寂寞の夜の。

ティムニウス（前二世紀）のうたの意を述べたるもの。次の「こほろぎ」のうたも同じ詩人のうたに依る。「カリス」は優雅を司る三體の女神、「ハルュクオオン」は冬至の頃、海に巣を作ると傳へらるる靈鳥なり。

こほろぎ

ときめけるアルキスの庭、帛(きぬ)裂くごとき
聲止みて、日のひかり汝を照らさず、
はるかなる黄泉(よみぢ)の原やペルセフォネエの
露しけき草間がくれに飛ぶよ、こほろぎ。

アルキスは人名なり。

ライスの鏡

一

そのむかし、ヘラスを笑ひ、みやびの子らを
家の戸につきへたるライスの鏡、
ささぐるを受けたまへ、パフォスの女神、
ながらふるおもかげを見るにえたへず。

二

ペルシャこそやぶりけれ、ヘラスよ、なれは
うるはしきライスの前に敗れにけらし。
おいらくの歳より外にやぶるものなき
その人のあかしぞと残す眞鏡。

エヂプトのイェリアノス（二世紀）のうたの意を述べたり。ライスは前四世紀頃存生なりし名だたる遊女なり。希臘詞花集にライスを歌へるもの多し。

パフォスの女神はアフロディテエなり。パフォスにその社ありし故なり。

三人のうから

いまここに三人のうから、バアンのためと。
置く網はそれぞれのたづきのしるし。
鳥をとるピグレスはこれ、これはダミスが
獵のしろ、クライトオルが岸よりぞこれ。
山幸はかくて一人にさきはひたまへ、
森幸は一人にめぐみ、深淵の幸は一人に。

アレクサンドリアのレオニダス（一世紀）のうたの意を述べたり。
シドンのアンティパテルにも同趣のものあり。

園丁

ささやかなる果樹の園より、果物つくり、
幸はへるとりいれの中にえらびて、
無花果と林檎と水をパアンにささけ、
祈るやう、「うつそみを幸ひし神、
わが園と泉の贄を受けいれたまひ、
捧ぐるにまさるむくゐを得さしめたまへ。」

ロドオペエ

うづまける丈長髪と玉の柔手と
ゆびさきに清く裁りたる爪は誰がため、
何かせむ、むらさきの糸ぬく衣も、
ロドオペエを遠く離れてさまよへる身に。
ロドオペエを見ずしては見るものあらじ、
ヘリボレエの紫磨黄金の光さすとも。

パウロス・シレンティアリオス（六世紀）のうたの意をのべたり。
ロドオペエ――薔薇瞼――は前六世紀の頃の美女、ペリポレエは作者と
同代の人なりしと見ゆ。

月あかり

夜まつりのよもすがら迷ふこひびと、
セレエネよ、かたちよき瞼を照らして、
わが君の妙色身に光をそそけ。
汝が目こそわかち讀むらめ、戀のむつごと、
かつて汝がエンディミオオンを抱きしごとく、
いまわれと戀人の幸は足らへり。

セレエネは月神なり。エンディミオオンはその戀人。

廢墟

うらぶれて塵に沈めるミュケエネエの町、
われはいま山の邊のごと荒れ果てにけり。
されどわれイリオンの壁ふみしだき、
プリアモスの家のおごりをかつて奪ひぬ。
今日は「時」暴虐をつくすに任す、
そのかみのあかしはひとりホメロスの卷。

ムサンドス・ムナティオス（年代未詳）のうたの意を述べたり。

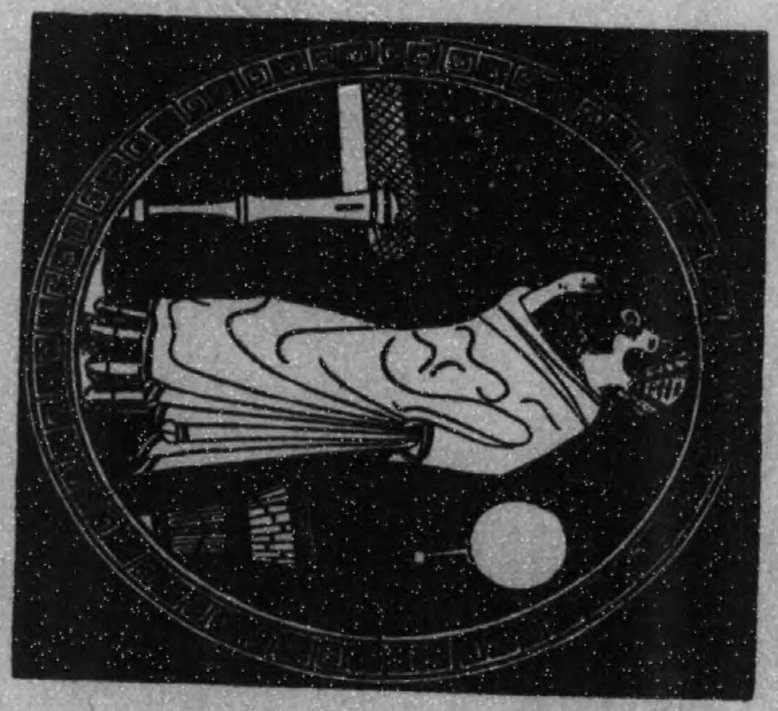
テルモピライ

ラケダイモンの國びとに、告げよ、旅人、
われらその掟をまもり、ここに逝きぬ、と。

シモニデス（前五世紀）のうたの意を述べたり。テルモピライはテッサリアよりフォオキスとロクリスに入る山道の險所、紀元前四百八十年、ラケダイモン（スパルタ）のレオニダス、三百人の兵と共に波斯の大軍と戰ひ、生きて返へるもの僅かに一人なりきと。

パンフィリヤ牧歌

ピエエル・ルイス



ビリティスは紀元前六世紀、パンフィリヤの東、メラスのほとりに生れたる女詩人なりき。タウロスの山波高く、憂鬱なる林沼澤池を繞れども、羊を追ひ蘆を吹く牧童のいとなみは清明暢達の牧歌となりて、アレトウザの泉、ミンキウスの流に傳へけむ優婉の詩情を偲ばしむるものあらむ。當時サッフォは麗容なほ衰へず、ビリティスとも親交ありき。われをレスボスにともなへるプサッファと言へり。

ビリティスの母はフェネキヤ人、父は希臘人なりき。幼くして父に

別れ、故ありてパンフィリヤを去りしより後は、小亞細亞を過ぎ、レスボスに留り、またキプリスにもさすらひぬ。佳人俠骨の名空しからず、死後二十四世紀を經てアマトンタの古道、バレオーリッシモに墳塋の發掘せらるるや、一道の妙香追ひ風にして薫じ渡り、側には色褪せし鏡さへそのままなりけりと傳へ聞くだに哀れならずや。

以下の諸篇は佛蘭西の詩人 Pierre Louys が Les Chansons de Bilitis の第一篇 Bucoliques en pamphilie「パンフィリヤ牧歌」より抄し、これにエピロオグとも言ふべき墓銘三篇を添へたり。「ビリティスの墓」と題す。レスボス、キプリスにて歌へるものの中には悲愁長恨の極をつくしたる絶唱あまたあれど、ここには唯うららかなる牧歌の姿清く

調涼しきものをのみを選びぬ。そのかみ、アルカディヤの笛の音をも聽くべし。

聞說、北イスラエルの古謠シル・ハ・シイルムには豐潤なる希臘山野の調を交へたりと。フェネキヤ人を母とせるビリティスの歌を譯するに際し、字句、聲調、おほかたは雅歌の體に從ひぬ。

藻風

樹

樹を攀ぢむとしてわれ衣を脱ぎすてたり。裸形の股は滑らかにして水ばめる木膚を抱き、わが鞋は枝をわけて進みぬ。

空高く、されごなほ葉は繁み、日ざしかぎろへる頂、廣ごれる三つ枝の上に跨りてわが脚を虚空に垂れたり。

しかのみならず、水は滴りてわが膚を流れ、わが手は苦にまみれ、

瞳は碎かれたる花に染みて紅かりき。

そよ風枝を吹く時、美き樹は生くるやとわれ思ひぬ。その時われは、いやかたく脚をひき緊め、ひらきたる唇は緑葉の髪に蔽はれし枝の頸頂に寄せたり。

牧歌

牧の小歌を歌はむ。夏吹く風の神パアンを呼ばむ。うち戯ぐ橄欖のまろき木蔭にわれはわが羊の群を衛り、セレニスはその群をまもれり。

セレニスは原に横はる、あるは立ち上り、走り、また蜉をもとめ、また草花を摘みあつめ、清きせせらぎにその面を洗ふ。

われは白き羊の背より羊毛をとりて緒車に巻き、絲を紡ぐなり。時は長閑にうつり、鷲一羽、大空を過ぐ。

日かげ傾きぬ。いざ花籠を乳の小瓶に置きかへむ。牧の小歌をうたはむ。夏吹く風の神パアンを呼ばむ。

母の教

未明に母はわれを浴せしめ、眞晝に衣を着かへさせ、灯影に化粧させたまふ。されど若し月明に眠ることあれば、わが帶を締めて二重の結び目を作りたまふ。

母は言ひたまふ。「處女とあそべ。幼兒と踊れ、戸の面を見るなかれ、若き子の言葉より遁れよ、老いたる者の誡を恐れよ。

「ある夕、世の人のごとく汝にも來る者あらむ。鳴りひびく鏡鈸、心を溶かす笛の音のおほらかなる列を過ぎて汝を闇に迎へむ。

「その夕こそ汝が去るべき時なれ、ビリティスよ。汝はわがために三つの苦き瓢を殘さむ。ひとつは朝のため、ひとつは眞晝のため、またのひとつ、殊に哀しきひとつこそ宴の日のためなれ。」

月光の中に眠る時は物狂ひすと言へり。かつて嚙み誦みしボオドレエルの散文詩に妖艶なるものありしを今に忘れず。「二重の結び目」はこの災を解く冤除禁厭のたぐひならむか。瓢は瓶子なり。

素足

われは背に沿ひて流るる黒髪とささやかにまろき帽子とを持てり。
わが肌ぎぬは白妙の布。わが脚は日に焦けて褐し。

若しやわれ都に住みもせば、黄金の珠玉、金糸の衣、白銀の靴を
持ちしならむ。……塵塗れなる靴の中にわれはわが素足を見るなり。

ブソフィス。いとし、可愛き子よ、ここに来れ。われを泉に抱き

行け。わが足を汝が手に洗へ。橄欖と薑とをおしつぶして馨はしき
花の薫に染めよ。

今日汝はわが奴僕なり。われに從ひ、われにかしづけよ。ひと日
の終には汝が母のため、われわが園の豆の實を與へむ。

老人とニンフと

盲目の老人は山に住めり。ニンフを見て盲ひしより時はうつりぬ。かくて後、その禍祉は遙かなる追憶のみ。

「さなり、われニンフを見き。」とをきな言ふ。「ヘロプシクリヤ、リムナンティス、かれらフィソスの水縁なる泉のほとりに立ちけり。その膝を超して水はかがやきぬ。

「ふさやかなる髪のもとに頸頂はかたむきぬ。爪は薄くして蟬の羽のごとし。乳嘴は風信子の花に似てくほみたりき。

「かれら指を伸べて水上をまさぐり、眼に見えぬ花瓶より睡蓮の長きひと莖を手折りぬ。ひらきたる股のめぐりには緩やかなる波の輪をなしてひろごりぬ……」

物語

われはをさな兒に慕はる。かれらわが姿を見るや、驅けよりて裾をとり、小さき腕にわが脚を抱く。

若し花を摘みたらば、われにその盡くを贈る。若し黄金蟲を持ちたらば、これをわが掌に置く。若し何物をも持たざれば、われをかき抱きてかれらの前に坐らしむ。

かくてわが頰に頰ずりし、わが胸に頭を載せてまなざし冀ふごとくわれをまもる。われその言はむとすることを知れり。

これその言はむとすることとなり。「愛するビリティスよ、われらかく大人しければ、請ふ、語れ。丈夫ペルシウスの物語、またはいとほしきヘレナの最期を。」

ビリティス

ある女は白妙を纏ふ。またの女は絹と黄金とを裝ふ。またある女は花と葉と葡萄とを被く。

われは裸にて生くることを知るのみ。戀人よ、このある儘にわれをとれよ。衣なく、珠なく、足結なく、ビリティスただ一人ここにあり。

わが髪は生れのままの鴉羽色、わが唇は生れのままに紅し。ふさ

やかなる髪、鳥の羽根のごとく、まろく、また心のままに躍れり。

われをとれ、遠き愛の一夜わが母のせしやうに。かくて若しわれ君を喜ばせしならば、請ふ忘れずにその事を語れ。

ビリティスの墓

第一の銘

泉わたつみより湧き出で、河の水底は巖もてなれる國に、われ、ビリティスは生れたり。

わが母はフェネキヤ人、わが父ダモフィロスはヘレナ人なりき。わが母はわれにまだきの朝よりも哀しきビブロスの歌を敎へぬ。

われキプリスにアスタルテをおろがみ、プサッファをレスボスに知れり。われはわが愛の如何なりしやを歌ひぬ。生甲斐ありきと知らば、道行く人よ、これを汝の娘に告げよ。

わがために黑き山羊を生贄とするなかれ。ただなつかしき手向の水、その乳房を墓の上にしほれ。

萬象の生命老いて草木地に委する頃古代希臘の民は哀れなる葬送の傳說を作りぬ。ヰイナス、アドオニスの物語、戀人を求めあぐみて泉

となれるビブロスの傳説はここに源を發す。パレスティイナの北、フェネキヤに近く、ビブロスの泉ありて、アドオニスを弔ふ祭は今日なほ滅びず。ルナンが耶蘇傳の序に妹アンリエットに寄せたる哀切の文、既にこれを語れり。

アスタルテはフェネキヤの女神。豐熟と性交とを司る。バビロニア、アッシリアにてはイシュタル、希臘にてはアフロディテと稱へたり。聖經に所謂異邦の神なり。

第二の銘

うら悲しきメラスの河岸、パンフィリヤのタマソスにわれ、ダモフィロスの娘、ビリティスは生れたり。故國を遠く戀へることと汝が見るごとし。

幼くしてわれはアドオニスとアスタルテとの戀物語、シリヤ聖者の異跡、「瞳つぶらなる者」に逝きまた蘇へることを學びぬ。

あそび女なりきとて何の咎ぞ。これ女の務にあらずや。旅人よ、

「萬有の母」は導きたまふ。彼を知らざるは謹慎にあらず。

ここに立ち留る者のためにわれ歎びてこの宿命を惠む。つとめて愛せられよ、愛するなかれ。いざさらば、汝がおいらくの日わが墓を見しことを思ひ出でよ。

かつてわれイグナチオ・スロアガの描ける佛蘭西の女詩人、コンテス・マティウ・ド・ノアイユの全身像を見て「わが灰に煖味あらむ」と歌ひし奔放の詩句を口吟みつつ、遠くピリティス、サッフォオの昔を偲びたり。これを解せずして希臘思想を語るべからず。レスボスの松風濤聲三千

年を經てルウマニヤ公女の血管に燃ゆるを見ずや。

シリヤ聖者の異跡、瞳つぶらなる者の因不詳。基督傳説の所因遠きを思ふべし。「萬有の母」は希臘小亞細亞をはじめ古代の民を擧げて信仰せる大思想なり。名稱は異れどもアスタルテ、アフロディテエ、エフェソスのアルテミス等すべて繋らざるはなし。老子も亦玄牝の門は天地の根と言へり。

最後の銘

桂の黒き葉かけ、薔薇の花うるはしく咲き亂れたるここに、歌を歌に織りなし、接吻の花を咲かしめたるわれは横はる。

われはニンフの里に生ひ立ちぬ。われは友垣の島に住ひぬ。われはキプリスの島にみまかりぬ。これわが名の稱へられ、わが墓に香油の流れやまぬ所以なり。

われを悼むなかれ、立ち留る人よ。世はわがために美はしき葬送を行へり。泣き女の頰はやつれたり。世はわが墓の中に鏡と襟飾とを置けり。

今われはアスフォデルの花青き野にさすらふ。觸れ難き影となりて地上の生涯を偲び、また幽界の歡をおもふ。

アスフォデルはプルウトオ(ポセイドン)、ペルセフォネの領、冥府に咲く花なり。

○

ピリティスの歌に就いてはこの外にハイムの研究、リヒヤルド・デエメルの譯、クロオド・ドビュッセの樂譜ありといふ。客窓時を得ず、參照の書もなくして机上ただピエエル・ルイスが詩集一卷あるのみ。註といふほどのものならねど、中に挿める文辭は盡く記憶を辿りて記したり。若し誤謬臆測もあらば改めて訂正することあらむ。

○

後記。ピリティスのこと詳らかならず。譯者の若かりし頃、外遊の途上にルイスの詩集を繙きてこの篇を編みぬ。かりそめの文辭をそのままにとどめしはただ當時の感興を懷しむに依る。

聲律

わが創作の詩の中より古代のおもかげをとゞむるもの十四篇を收む。もとより希臘、小亞細亞の風雅にあらず。またアレクサンドリア、シチリアの餘響にもあらず。唯、かの細くして清らかなる詩歌の道を行くもの、いつの日かめぐりあへる太古の水の流なりと言はむ。これは希臘の心なり。イデアなり。近代古典派の理想なり。

藻風

聲律

はなやかに妙なる音の波ゆらぐ
夏の晝、想の海に身をひたし、
そよそよと吹き送る夕風のもと、
かぐはしき花の香にわれかのここち。

つつましき伴奏の音絶え絶えに、
かつ近み、かつ遠み、うちせまる波、

外面にはさらさらと枝葉さゆらぎ、
小鳥さへたまゆらの聲をひそむる

人氣なきわが心こそ靜かなれ。
君が手に觸るる白波、碎かれて、
夕風の海に寄するか、ほのぼのと、
はるかなる空に消えゆく片帆舟。

夏

L'amertume d'avoir été dans le passé.

Henri de Regnier

こしかたに夏ありき。その苦しみと
かぎりなきよろこびは空のおもてに
うすれゆく虹よりも色あだめきて、
ほのぼのと心の上にかかりけるかな。

いまわれはやすらかに身をよこたへて、
生垣のかなたを過ぐる「時」の足、
わが門を訪ひもせず、ひそひそと、
離りゆく衣ずれの音に聽き入り、

ここちよきそよ風のあやすまにまに、
手に持てる書さへ重くうとうとと、
まどろみに入るとはすれど、悲しくも
夢になほ消え殘るこしかたの夏。

想の廬

若しや汝、若立の緑をわけて、
森ふかき泉のほとり、ほそぼそと
灯のともる草の廬にいたりなば、
旅人よ、汝が足の音をひそめよ。

うつそみのわれをいとひて遁れたる
想こそ清く住むらめ、ふるさとの

大原や野山のはてを佗びくらし、
こよひはた何處にあらむ、月あかり、

そのかみのリディアの原を照らすとも
すだきよる蟲の音のひとつひとつに、
笛吹きて辿り行くとも、えやは知るべき。
この世にはかへらざる想の廬。

夕月

夕ぐれの光のなかに
歩み入るおもひの渚、
うすれ行く空の彼方に
ほの白くかかる夕月。

はだか身の月のをとめは、
髪なびけ、白きただむき、

わなわなとうち震はせて、
今か射る、光の征矢を。

かすかなる弓弦のひびき、
夕闇に鳴りわたれども、
久方の空をかすめし
征矢のあと、絶えてきこえず。

風に乘る

風に乘る
わが心、
はつ夏の
窓を越ゆ。

青空の
藍に染み、

雛菊の
黄にまみれ、

窓かけを
うちゆすり、
ほつれ髪
みだしつつ、

ころげ込み、
躍り入り、

くぐりぬけ、
飛び過ぎて、

かがやかに
歌ひつつ、
風に乗る
わが心。

月あかり

靜かなる月あかり、
こまやかにさゆらぐひかり、

淡海の底にも似たる
夜のくに、夢のふるさと、

たち迷ふ狭霧のなかに

水藻なす森の木かげ、

魚のごと、うつらうつらに

うき沈むわがこころ。

こころ

こころはつねに孤獨(ひとり)なり。

たとひ花やかなる友垣のなかにありとも、

恵ある父母と住むとも、つねに、

眼に見えぬ流の波にとりまかれ、

いづこへか、心はひとり行きまよふ。

月よ、わが旅人を見も知らぬ

流の上にみちびきて、
わたつみの長き憩に入らしめよ。

冬の日

日は遠き
海をめぐる、

世の涯の
トゥウレの島に、
波の上に……

わたり行く
翅の足結の

はるかなる
いと遙かなる
ああ、その聲、
ほのかに聞こゆ。

ナイアッド

水涯に立てるナイアッドの
あはれぶかきまなざしのゆゑにこそ
その日、垣間見し瓶つくりは
絶え入るまでになやみしか——
ダフネの杜に入るなかれ。
ゆめな思ひそ、
水涯に立てるナイアッドを。

日の終

大空の西のはてより
日は遠く國見するなり。
たくましき右手をあけて、
かへり見る紫紺の海に
うつしよの港の町は
くれなゐの霧に沈みぬ。

やすらひの時は來りぬ。
波の音も冴えまさりけり。
しめやかに世はかぎろひて、
「死」のすがた波間にうかび、
ネレウスの子等の歌ごゑ
吹く風にみちひろごりぬ。

いまし、日はふりむきざまに
黄金の征矢を投げたり。
金色に燃ゆる斷崖、

垂天の雲の裂け目に、
力なくよろめきながら、
微笑みて、息絶ゆる時。

嗟嘆

蘆の葉に月はかたむき、
そよ風は森をわたりぬ。
ひそやかに漾ふひかり、
うちむせび忍び泣く聲。

ほのぼのと水は流れぬ、
かすかなる夜の足おと、

ロスサテュは嘆き疲れて、
草かけの夢にまどろむ。

蘆の葉に月はなびきて、
森はまた銀をちりばめ、
大空は聲を投げたり、
死の如く悲しき聲を。

水夫のうた

月の出汐のしづけさよ——
はてしなき海は眠れり。
いざ友よ、いく秋のならひのごとく
けふもまた破れたる船べりに、
ほのかなる笛を吹かまし。
月の出汐のしづけさよ——

われらが水の墓は
かすかなる瞳をひらく。
友よ、聽け、ドルフィンの歌にまじりて
流れよる他界の聲を。

月の出汐のしづけさよ——

女のうた

朝ごとにやさしき歌をうたはむ、
わが持てる寶石のかずを數へむ、
子らよ、また葡萄のかげに、
なつかしきゑまひを。

されど、遠野に日の沈むとき、
日をひと日、かひなき勞役のゆゑに

わが眼くもらば、
よしさらば、露しげき木立のもとに
夕月の光を待たむ。

巡禮のうた

水無月の野はやすし……
みちのべの花は音もなくひらき、
波の穂もしらみそめぬ。

さらばまた杖をまくらに、
かすかなる匂のなかに、
けふも眠るべきか……

みよ、遠き夢の精舎に、
黄蠟の灯したたり、

静かなる港の岸の
柳のもとに、
泊する青き船——
月の出になげく小鳥よ。

うつしよの旅路の果に、

静寂の町の夜を眺めつつ
ひとり眠るべきか……

12504
ね

大正十三年八月三十日印刷　1—1.100
大正十三年九月二日發行　〔定價一圓五十錢〕

希臘詞花抄

著者　竹友虎雄
東京府北豐島郡長崎村一六二

發行兼印刷者　長島豐太郎
東京府北豐島郡長崎村一六二

印刷所　曙野社印刷所
東京府北豐島郡長崎村一六二

發行所　新しき村出版部
東京府北豐島郡長崎村一六二
振替東京　五三五四七
電話小石川　七〇九九

529
120

終